

人間の務めは美しい それは祈ること

人間は美しい務めをもっています。それは祈ることと愛することです。あなたがたが祈り、愛しているならば、この世での人間の幸福を見出したことになります。

祈りとは神と一致することにはかなりません。心が清く、神と一致しているときには、芳しい香りと、酔うような甘美さと、目がくらむような光を自分のうちに感じます。この親密な一致にあっては、神と人の魂とは二つの蠟の塊が一つに溶け合ったようなものです。もう切り離すことができません。神とその小さな被造物とのこの一致は、なんとすばらしいのでしょうか。理解を超える幸福です。

わたしたちは祈るに値しない者になってしまいました。いつくしみ深い神は、ご自分と話すことをわたしたちにゆるしてくださいました。わたしたちの祈りは、神がたいへん喜んでお受けくださる香の煙なのです。

皆さん、あなたがたの心は小さい。けれども、祈りはその心を大きく広げ、神を愛することができるようにしてくれます。祈りは、この世ながらの天国の味わいであり、天国のほとばしりです。決してわたしたちの心を味気ないものにはおきません。祈りは人の魂のうちに流れ込んで、すべてを和らげる蜂蜜です。よく祈れば、苦しみは陽光に消える雪のように、あとかたもなく消え去ります。

祈るときには、またたくまに時間がたってしまいます。そして、もう長い時間がたったことに気づかないほど楽しいものです。お聞きなさい。わたしがブレスの主任司祭だったとき、その地方の司祭たちがほとんど皆病気で倒れたため、あの地方を巡回しなければなりませんでした。そのとき、わたしは長い道のりをずっと神に祈って歩きました。本当に、旅の時間を長く感じることはありませんでした。

まるで水の中の魚のように、すっかり祈りに浸りきってしまう人がいます。そういう人は、完全にいつくしみ深い神のものとなっていて、心はまったく分たれていません。ああ、わたしはこういう惜しみない心の方が本当に好きです。アシジの聖フランシスコや聖女コレタはイエスをまのあたりに眺め、わたしたちが互いに話し合うように主と話していました。

ところが、わたしたちはこれと反対に、教会に行くときにたびたび、そこで何をすべきか、何を願うべきかを知らずに行くではありませんか。だれか人を尋ねて行くときには、何のためにそこへ行くかをはっきりしているのに。いつくしみ深い神に向

かって、「あなたを厄介払いにするために一言だけ言わせてもらいます」と言いたげな人さえあります。わたしはよく思うのですが、主を礼拝するために来るとき、生き生きとした信仰と清い心をもって願うならば、何を願っても必ず聞き入れられるにちがいありません。

ヨハネ・マリア・ビアンネ（1786～1859 祝日：8月4日）